經濟論叢

第七十二卷　第六號

マルクス死後七十年記念號

マルクス經濟學の現代的意義……岸本誠二郎（1）
剰餘價値率・利潤率・利益率……岡部利良（10）
資本制生產社會の基本的矛盾と恐慌…吉村達次（33）
マルクス「經濟學批判體系」研究序說
……吉信肅・齋藤博（50）
林業地代論の一考察……鶴嶋雪嶺（89）

〔昭和二十八年十二月〕

京都大學經濟學會

マルクス經濟學の現代的意義

岸本誠二郎

マルクス經濟學は「異端」の經濟學である。「正統」の經濟學からはつねに白眼視されていた。從來マルクス學は全面的に排擊され無視されていた。そして現代においてそれは過去の遺物とさえ考えられていた。

マルクスは默殺されるには餘りにも有能であつた。人々は彼を黙つて見送るわけにはゆかなかつた。ドイツのゴッセンや英國の幾多の限界主義先驅者たちは世間の注意をひかずして無視されたのであるが、マルクスの業績は見逃しえないほど大きなものであつた。これを無視することになると、それは意識的に故意に無視しなければならなかつた。だから昔、ゾムバルトが社會主義、ことに科學的社會主義たるマルクス主義をはじめて講壇でとりあげたとき、學界に大なる衝擊を與えた。

マルクス學は無視されるよりも強く攻擊されてきた。機會あるごとに攻擊され、いくら排擊してもなお足りないほどに排擊されてきた。余りにも度々攻擊されると、人はかえつて味方となるものである。ボーナーはかのマルサス研究のうちで、世間から猛烈に攻擊されたマルサスについて次のようなことをいつている。――一人や二人ではなく一千人や二千人の人が惡罵に加わるならば、その確實性は一つの證明となる。われわれは惡罵せられる人の論

理の健實なることを、彼に加えられた個人的攻撃の激烈さによつて測りうるであろう、と。排撃されたマルクスについても人々はこのような考えをいだくようになる。

それにしてもマルクスについて何故に激越辛辣な排撃が加えられるのであろうか。それは第一にマルクス學はその理論のうちに實踐的政治的契機を藏するばかりでなく、第二に現代經濟の弱點を示したからである。第二の點は後に立入るとし、第一の點につきマルクス排撃者はみずから知ると知らざるとにかかわらず、これを排撃するためにみずから單純に政治的となるのである。マルクスには氷のような理論があるのだが、排撃者は灼熱した鐵のようになつてぶつつかるのである。これでは攻撃の論理が亂れるのはやむを得ない。

マルクス經濟學は過去の遺物だという考えも容易に人々を納得させない。なるほど「資本論」第一卷が出版されて八十六年、マルクス死後七十年、この間の經濟學の業績はすばらしい。しかしそのために古い經濟學が無用にはならない。これは自然科學と異なるところであろう。自然科學では學問の發達が直線的である。最近の自然科學は恐らく過去のいずれの知識をも消化しつくし、現在のところ最も完全なものとして存在するであろう。だから自然科學を學ぶものは、最新の成果を學ぶならばそれで十分なのである。しかるに經濟學ではそうではない。古いすぐれた經濟學は骨董品ではなく今日も有效な思考たることを失わぬのである。例えばケネーやアダム・スミスの經濟學はその重要な部分が最新の經濟理論と同樣に重要である。ケインズが雇用理論を展開するについても百余年前のセイの法則を檢討したのである。そればかりか重商主義を檢討して自己の理論の裏づけをしている。マルクス經濟學にしても同樣である。ことに彼の經濟學は彼以前のあらゆる經濟學を丹念に吟味して出來上つているだけに今日も研究される價値の極めて大なるものである。

「經濟學では經濟學史の研究は特に重要なる意味を有する。學史の研究はすでに滅びたる諸學說の骨董品的評價ではない。それぞれの經濟理論は直接にはそれぞれの時代、段階の經濟を對象として形成される。それらはそれぞれの時代の理論としての意味を有する。しかもわれわれはこれらを現代の立場より研究し現代の理論として理解する。それらは等しく近代資本主義經濟を分析するという點で共通の基盤を有するからである。從つてこの學史的研究はそれ自身原論的研究である。ただこの研究は直接に現象そのものに結ばれず、學說、理論に結ばれているだけである。經濟學においては原理的研究を完了するには、對象そのものの研究とともにこの種の研究が絕對に必要である。マルクスやベエム・バウエルクがその積極理論を決定的な形で確立するについて、詳細な學說批判を行つたのはそのためである。彼等に骨董いぢりの余暇はない。「經濟學批判」はそれ自身が積極理論の研究である。

新しい經濟學が學史を抹殺するとするならば、それ自身が理論的誤謬である。マルクス經濟學もスミス、リカアドとともに、あるいはメンガー、ワルラスの經濟學とともに無視されず抹殺されず冷靜に研究されなければならぬ。それらは等しく經濟學の尊い遺產であり、現代の經濟學である。われわれは現代の立場から、これら遺產について學ばなければならぬのである。

ところが今日マルクス經濟學が新しい經濟學によつて反省されつつあるのは注意をひくところである。ロビンソンのマルクス批判をとつて見よう。ロビンソンはマルクス經濟學のうちに今日學ぶべき多くのものあることを認めながら、その價値論の無用なることを强調した。その說くところでは、わざわざ勞働價値說は持出さなくてもマルクスが論證しようとしたことは十分に論證できる。價値論を說いた「資本論」第一卷は獨斷論で、第三卷の價格の精密な規定は理論上第一卷と連絡はない。

またマルクスは均一な搾取率の假定から出發したため自分自身人爲的な困難におちいつてしまつた。この假定をおくことに對しては何らの根據もない。もし全產業における賃金が等しければ、雇われた一人當りの剩余、すなわち搾取率は雇われた一人當りの純生產力にともなつて變化する。そして一般に一人當りの資本がより大ならば、一人當りの生產力も大となる。搾取の事實はなるほど利潤を可能ならしめる。しかし搾取率が論理的にも歷史的にも利潤率に先行して取扱わるべき理由は少しもない。

論理的にいつて重要なのは、資本主義制度が所有階級にどれだけの剩余總量を獲得するに成功するかであつて、利潤を出すため、その總量を資本量で割る代りに、搾取率を算出するためこの總量を雇用された勞働量で割つたところで大した效果はない。歷史的にいつて異なつた產業が著しく異なつた搾取率、異なつた利潤率、そして異なつた資本の勞働に對する比率をもつて發展するのは當然である。そこで競爭におけるかけひきが共通の利潤率に落付こうとする傾向をもつ。それはちようど資本に對する勞働の比率の凸凹が相殺される水準まで、各々異なつた搾取率を抑えることになる。等しい搾取率から等しい利潤率への運動は資本主義の發展過程でなく、經濟分析における過程で、それは當初の勞働價値說から相對的需要と相對的費用との相互作用の理論への發展過程である、というのであつた (*J. Robinson, An Essay on Marxian Economics*, 1952, pp. 15-17)。

ロビンソンは勞働價値說の無用を强調するが、勞働價値說を除いてはマルクスの推論した第三卷の價格論も、また資本主義の崩壞論も說けない。第一卷における價値形態の發展論なくしては、貨幣の本質ならびに必然性は說けない。貨幣の本質が說明できなくて、資本の本質ならびにその運動の諸問題は說けないはずである。

ロビンソンはマルクスが搾取率すなわち剩余價値率の說明から平均利潤率の說明に及んだことを批判しているが、

これは當然の推論である。價値が勞働によつて形成されるから、生ける勞働と對象化された勞働とが區別され不變資本と可變資本の資本構成が意味あるものとなり、剰餘價値がその形成の上では可變資本との關係において理解され、從つて剰餘價値率がまず問題とされたのである。利潤が剰餘價値だということは、勞働價値より剰餘價値の形成が明かにされ、それが資本家的理解により、すなわち資本總額との關係において利潤という形態をとつて現われることが明かにされるからである。

ロビンソンは搾取率すなわち剰餘價値率が、論理的にも歴史的にも利潤率に先行して取扱わるべき理由がないというが、この意見にも理由がない。論理上、剰餘價値率が利潤率に先行して說かれることは、「資本論」において展開された理論の發展上當然のことであつて、剰餘價値の形成を明かにせずして利潤率の問題を先きに說くことはできない。

歴史上はどうかというと、なるほど産業資本の確立しない以前に前期的形態の利潤は存在したであろう。これは流通部面の關係から生じたので、資本主義本來のものでなく、いわゆる前期的のものである。これは産業資本の形成、發達とともに産業資本による生産を基盤にした本來の利潤に移行するものである。これこそマルクスの看過しなかつたところであり、新しい經濟學ではその歴史的發展は說明できない。

ロビンソンが剰餘價値率よりも利潤率をなぜ先に說かなかつたかとマルクスを非難するのは、おそらく新しい經濟學の實證主義の立場によるのであろう。實證の對象となるような具體的な事實は、利潤であつて剰餘價値ではないと考えられるであろう。マルクスも實證主義を無視してはいない。彼も近代科學の精神は十分に心得ている。しかし彼は實證の對象として日常經驗にとどまつていないで、その底に横わる歴史的經驗にまで掘り下げてゆく。勞

働價値の概念は勞働力が商品として取引されるようになつた近代社會の歴史的經驗に根ざしている。それは觀念的な假想物とか單なる理論的道具とかというものではない。リカアドが勞働價値の中心點をつかみながら、それを十分に發展せしめることができなかつたのは、結局價値の歴史的性格を反省しなかつたからである。リカアドは價値のよい感覺をもつていたが、新しい經濟學はこの感覺すらもち合せない。眼をふさいでこれを拂いのけようとさえ努める。それではマルクスの意圖したような現象の歴史的本質を理解することはできない。

今ロビンソンのマルクス批判の内容を深く追及しない。それよりもここに注意したいのはロビンソンがマルクス經濟學のうちから何ものかを學び取ろうとしていることである。ロビンソンのいわゆる「アカデミック經濟學」は從來マルクス經濟學を黙殺し、排擊してきたのであるが、ロビンソンは今やマルクスから大いに學ばなければならぬことを强調する。

從來マルクス經濟學は全面的に排擊されるのが普通であつた。第一卷の價値論が間違つているから、その上に立つ第二卷第三卷の理論展開は間違つているというのであつた。あるいは第一卷と第三卷は矛盾するから、「資本論」全體が間違つているというのであつた。しかるにここでは第一卷は間違つているが、第三卷は正しい。われわれはこれを學ばなければならないということになつた。これは大きな變化である。マルクスの論證過程は嚴密であつて一部分を認めたら、他の部分も認めなければならぬと思われていたのであるが、ここでは結論の方の部分だけが正しいということになつた。

シュンペーターのマルクス批判（*J. Schumpeter, Capitalism, Socialism and Democracy*, 1947, *part* I.）も似たような性質を有する。彼はマルクス主義は宗教だと斷定してその科學的性格を抹殺するのだが、それでもマルクスのヴイジ

ヨンは正しかつたとした。マルクスは、資本主義は崩壞するという正しいヴィジョンをもつていたが、その論證は間違つていた。「資本論」の論證しようとしたことは正しかつたが、「資本論」の理論は誤りであるというのである。

しかしシュンペーターはマルクスに公平であるように努めた。マルクスはしばしば誤謬を犯しているが、彼の批判者のうちには優秀な經濟學者がいたにかかわらず、これまた誤謬を犯している。これはマルクスの名譽のために記錄しなければならぬ。個々の問題に對するマルクスの批判的ならびに實證的貢獻も大である。ことに景氣循環の取扱いについて今日役立ちうるところが多い。方法論について優れた歷史的分析を行つた點が特記されている。經濟學者は經濟史の事實を理論にとり入れるについて、事實と理論を機械的に結びつけるにとどまる。しかるにマルクスの結合は化學的である。マルクスは結論を生み出す議論そのもののうちに經濟史的事實を導入した。彼は經濟理論がいかにして歷史的分析に轉化されうるか、また歷史的物語がいかにして理論的歷史に轉化されうるかを體系的に理解し、かつ敎えることにおいて最もすぐれていた最初の經濟學者であつた、とシュンペーターはマルクスの優秀を認めている。

ところでシュンペーターは資本主義崩壞のマルクスのヴィジョンを認めながら、マルクスのその論證を否定するのであるから、シュンペーター自身の崩壞理論はどうかということが問題となる。マルクスは資本主義經濟の發展のうちに、それが崩壞する事情が醸成されてゆくと說いたが、シュンペーターは資本主義經濟のうちにはそれを崩壞さす要因は存在せず、資本主義的企業者のすばらしい成功こそが、その社會的環境を變化せしめ資本主義を衰亡せしめると考えた。

それにしてもこの研究にあたつて、シュンペーターに最も必要なのは歷史的知識であり、經濟理論と歷史的分析

をいかに結ぶかということである。これについてはマルクスこそ最もすぐれた先輩であり、マルクスに多くを學ばなければならなかつた。

新しい經濟學は歴史理論を缺く。現代は歴史的變化に最大の關心のもたれる段階である。同じ型の現象が反復循環する運動を越えて、一方的に、かつ質的な變化の現われることが問題とされるのである。新しい經濟學における均衡理論が短期分析から長期分析に移り、景氣循環論の研究が長期波動、長期停滯、成熟經濟に及ぶようになると歴史的變化の研究に無關心ではありえなくなるであろう。これこそマルクス經濟學の研究し來つたところである。マルクス經濟學はわれわれがそのうちに住む資本主義經濟の崩壞という弱點をつくのだから氣味わるがる人の多かつたのも無理はない。しかし今日、それが事實として現われそうになつており、現實は眼をふさいで黙殺できない段階に達している。これはいずれにしても大きな歴史的變化である。今日新しい經濟學、アカデミック經濟學からマルクス研究の生れるのは理由なしとしない。

ここに經濟學研究史上一つの新しい段階が現われる。經濟學は永年にわたりアカデミック經濟學とマルクス經濟學がその方法においてもその對象においてさえも、別個の經濟學として別々に發達してきた。經濟學を研究するものは、兩者の關係の規定が永く未解決のままの不便にわずらはされていた。その間一方が他方の排擊論をやるか、機械的な折衷主義者が現われるにとどまつた。今日資本主義經濟の崩壞問題を契機として、新しい經濟學も偏見を去つてマルクス經濟學を學ばなければならぬ。それはマルクスをいかに排擊すべきかという研究でなくて、マルクスからいかに學ぶべきかという研究である。

マルクス經濟學も決して固定的ではない。「資本論」は資本主義經濟の頗ぶる詳細な基礎理論であるが、マルク

ス自身もしばしば指摘しているように問題を限定して研究した。一例をあげれば周知の「經濟學批判序說」にかかげられた經濟學の篇別を見ても明かである。(*Zur Kritik der politischen Ökonomie, hrsg. von Kautsky, S. XLV*)。マルクス死後七十年、彼が說くに至らなかつたこれら諸問題は順を追うて研究されたし、今後も研究されることであろう。

課題はそれにつきない。新しい經濟學はすでに多くの業績を有する。マルクス經濟學は今後の發展のために、その業績を學ぶことが必要である。何故かなら今日要求されるのは資本主義經濟の崩壞の理論的斷定以上のものである。今日社會主義は思想の段階を越え制度としての問題になつている。それへの移行の問題は極めて重要である。理論的斷定以上に移行過程の量的規定の研究が必要である。經濟の量的變化過程の規定は、新しい經濟學によつて詳細に研究されているところである。この研究を怠るならば理論は觀念論に終る。それはマルクス理論の最も忌むところである。一例をあげておこう。問題のスターリン論文を見給え。スターリンは社會主義經濟の研究について取上げるべき問題として「國民所得の問題」を指摘し、私は教科書草案のなかに國民所得に關する新しい一章を無條件に入れるべきだと思うと述べている。國民所得論は新しい經濟學の最大の業績であることはいうをまたない。マルクス經濟學も偏見をすててその業績を立入つて研究しなければならぬ。

經濟學は封鎖的であつてはならない。黨派や宗派の活動でもなければ祕傳でもない。最も公共的な知識である。われわれはマルクス經濟學について從來つくられていた封鎖を拂拭解放して經濟學の研究を前進させなければならぬ。